

中級前の学習者への creative writing 導入の試み  
 ATTEMPTS TO INTRODUCE CREATIVE WRITING INTO PRE-INTERMEDIATE  
 JAPANESE COURSES

水戸淳子, 香港大学  
 Atsuko Mito, University of Hong Kong

### 1. はじめに

creative writing は主に詩や物語の創作といった形を取り、文芸的な創作／表現と日本語では称されることが多い。一般的に日本語教育では実生活で現実に想定されるやりとりや日常的な社交、実用的な場面での言語活動を目標とした練習や課題を行うことが多く、また学習者が表現において使用できる語彙や文型の自由度を考慮して、こういった創作活動は上級少なくとも中級になってからというケースが多いのではないと思われる。筆者は中級前の学習者に対して俳句や物語の作成といった創作活動を取り入れる試みをこれまで行ってきた（水戸・瀬尾 2011）（水戸 2013、2014、2016）、本稿ではそれらをまとめて紹介すると共に、今年新たに行った詩の創作活動を紹介し、今後の課題について考察したい。

### 2. creative writing とは

creative writing とは日本語では「創作」「文芸」という言葉を用いて「創作文」「文芸的な創作／表現」とされていることが多い。日本の大学教育の中では文学部の中に「文芸学科」「文芸専修」といったコースが設置され、小説、詩歌、脚本といった言葉による創作／芸術活動やまたそれらの批評や理論の研究が行われている。またカタカナで「クリエイティブ・ライティング」と使われることもあり、広告・宣伝活動における言語表現を指すこともある。

アメリカなどの一部の海外で creative writing は積極的に初中等教育で行われている一方で日本の「国語」教育で取り上げられることは少ないようである（渡辺 2007）。また CEFR においては A1、A2 のレベルから想像上の (imaginary) 人々について書くことや詩の作成が Can-do の項目にあり、creative writing の要素が早い段階から取り上げられていることが見受けられる（吉島・大橋 2008）。

### 3. creative writing を導入した授業の概要

creative writing の導入を試みたのは筆者が香港の大学で担当している "Japanese for effective communication" (以前は "Productive skills") という名前の授業である。この授業ではスピーキング、ライティングの様々な形式に慣れ、日本語での自己表現、コミュニケーション力を高めることを目標にしている。この授業は選択科目で、日本語の必修コースに付随する形で行われており、学習者は必修コースでは『みんなの日本語初級Ⅱ』の 36 課～50 課を学習中である。履修者の中には独学で日本語を勉強してきていたりする学生も多く、単純にこのレベルだとは言いつけられないところもあるが、文法の知識で言えば大体このレベルに属している。またほぼ全員が日本語を専攻または副専攻している学生であり、2 年生から 4 年生までが取ることができるが、2 年生が大半を占めていた。授業時間は週 2 時間が

12～13 週あり、年度によっては授業外でチュートリアルでの個別指導の時間を入れることもあった。また受講者は毎年 20 名ぐらいであった。

#### 4. creative writing の試み

この授業で筆者が試みてきた活動は①日常生活場面の会話作成、②物語の創作、③俳句／川柳／短歌の創作、④詩の創作の 4 つである。①～③は過去何年にも渡り行ってきた取り組みであり、本稿以外で取り上げたことがあるものもあるため、簡単な紹介にとどめ、今年新たに組み込んだ④の活動について主に紹介したい。

##### 4-1. ①日常生活場面の会話作成

この活動は『聞いて覚える話し方 日本語生中継 初・中級編 1・2』を用い、課の最後にある会話作成の課題を書いてもらうという内容である。これは元々は creative writing を意図したものではなかったが、設定された会話の目的を遂行するためのいわば手続き的なディスコースを書いてくるだろうという授業担当者の予想を超えて、ちょっとした寸劇になっていたり、人物設定が練られているなどの工夫があったりする会話集が生まれてきている。

##### 4-2. ②物語の創作

この活動は 4 コマ漫画の会話部分を作成してもらったり、絵の人物を主人公にした物語を個人で書いてもらったり話してもらったりするという活動である。またクラス全体で順番に一人一文ずつ物語を即興で付け加えていくという形での創作も行っている（水戸 2013、2014）。

##### 4-3. ③俳句／川柳／短歌の創作

この活動は発表会を目指して日本語の拍などの音声面での学習を行いながら、発表会で自分が好きな俳句／川柳／短歌などと共に自作の俳句／川柳／短歌を披露するという活動である。発表会では Q&A も行い、またコメントをお互いに送り合う活動もしている（水戸・瀬尾 2011）（水戸 2016）。

##### 4-4. ④詩の創作

###### 4-4-1. 背景

詩の創作を試みようと思った背景は 2 つある。1 つは 4-3 で紹介したようにこれまで筆者が学習者の書いた俳句／川柳／短歌の 5・7・5（・7・7）という短い定型詩を見てきた中で、もう少し長く書き連ねる形での表現もやってみたらいいのではないかと思ったことである。2 つ目は筆者が所属する大学の日本語コースでは毎年学年末に学生達の発表イベントがあり、この授業を取っている学生達の殆どが前年度に自分達の好きな日本語詩・歌詞を選んでグループで発表する「詩の朗読」に参加しており、イベントでの発表グループに選ばれていなくても必修の授業では必ず参加しているため、日本語の詩というものにある程度馴染んでいて考えたからである。またこのイベントで最上学年のコースはチーム対抗の形で自作の詩を朗読し審査員に評価してもらうという「詩のボクシング」を行って

おり、この授業を取っている学生達が2~3年後にこの活動に参加する可能性が高いため、「橋渡し」的な意味も考えたというものもある。

#### 4-4-2. 活動の流れ

全体的なスケジュールから考えて、この活動に使える時間があまりなく、多くの詩を読んで鑑賞するなどの準備に時間が取れなかったこともあり、筆者が選んだ2つの詩を授業で鑑賞し、その詩のどちらかの型を使って創作してもらうことにした。

取り上げた詩は谷川俊太郎の「生きる」と宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」である。「生きる」を取り上げた理由は非常に型がシンプルで自由度が高く使いやすいということと、上述したイベントで学生たちによく選ばれ朗読されていたからである。「雨ニモ負ケズ」を選んだ理由は「生きる」よりは型としては難しいが自由度があるということと、2011年の東日本大震災の際に香港のタレントが集まり日本を応援する歌としてこの詩に曲を付け日本語で歌唱したのが広く報道されており、香港の社会である程度知られていると考えたからである。

「生きる」の詩は「～ということ」「それは～ということ」「それは(名詞)」といった名詞(文)だけを使って「生きる」ことの意味を表現するという詩である。「雨ニモ負ケズ」は冒頭の「～にも負けず(～ず)」という型で始まって、ある人/あるものを描写していき、結びの「そういう～私は～たい」でそれが自分の理想の人/何かであるという願望を表現する詩である。1時間ほどを使ってこの2つの詩を読んで鑑賞し、翌週までの宿題として上述の型を参考にして自分の表現したいことを表してもらった。あくまで詩の型は利用するが、何について書くかは各学習者の自由とし、様々なバリエーションがあり得ることも紹介した。例えば「生きる」ということの代わりに「美しい」ということ、「幸せ」ということ、「夢がある」ということ、「大学生である」ということなどを挙げた。また「雨ニモ負ケズ」の結びのバリエーションの例として「そういう人生を私は送りたい」「そういう仕事に私は就きたい」「そういう夏休みを私は送りたい」「そういう恋人に私は出会いたい」などを紹介した。

またこれら2つの詩は内容的に深く、連ごとの構成などに着目して解説を加えることもできたが、時間的な制約からそういった詳しい説明は行わなかった。

翌週の授業では4~5人のグループに分かれてお互いが書いてきたものを読み合い、質問し合ったり、感想を伝え合ったりする活動を行った。4分の3の学生が「生きる」の型を、4分の1が「雨ニモ負ケズ」の型を使用していた。また、授業後の宿題としてグループ内でお互いの詩に対してコメントを書き合ってもらった。その際、担当教師である筆者からも各詩に対してコメントを送った。詩やコメントは学習プラットフォームである Moodle を通してクラス全体で共有した。また各詩の創作背景について筆者による学習者への短いインタビューも行った。

#### 4-4-3. 学習者の作品例とコメント例

以下にいくつかの作品例とそれに対してクラスメートから送られたコメント例を紹介するが、これらは学習者が書いてきた原文のままであり、何も手が加えら

れていないものである（但し学習者名が入っているところは〇〇という表記に換えた）。またこれらは学習者から使用許可を得ているものである。

作品例①：「成長」

成長ということ  
それは年を取るとということ  
背が伸びるとということ  
恋愛ができるということ  
お酒を飲めるとということ  
親の話を聞かなくてもいいということ  
自由に生けるとということ

私はそう思っていた

成長ということ  
それは責任を取るとということ  
わがままを言わないということ  
恋人に傷つけられるということ  
夢から醒めるとということ  
寂しさを感じるということ  
我慢して涙を呑むということ

私はそう思っている

成長ということ  
それは傷から立ち直るとということ  
自分を傷つけた人を許すということ  
全てを乗り越えてみせるということ  
幸せになるとということ

私はそう望んでいる

「成長」に対するコメント例：

〇〇さんの詩は過去、現在、未来という流れでうまくまとまったと思いました。わたしなりに解釈すると、子どもにとって成長は自由になる素敵なことだけど、実際に大人になるとは現実を突きつけられて辛いことだった。けれど成長するのは体だけじゃなく、心もそれに似合う寛大さを持つと、それら全てを受け止めて、幸せになるじゃないかなと。「年を取る」と「責任を取る」はわざと合わせたんじゃないかなと思いました。この詩は人々の悩みも希望も描けて素敵な詩だと思いました。

作品例②：「家族」

家族ということ  
毎日会うということ  
一緒に暮らしているということ  
生命の原則を教えるということ  
お互い世話するということ

家族ということ  
優しい母ということ  
偉い父ということ  
いたずらな弟ということ  
可愛い犬ということ  
誰でも代わらないこと

家族ということ  
悲しい時、帰りたいということ  
楽しい時、シェアをしたいということ  
寂しい時、会いたいということ  
困る時、助かりたいということ  
いつでも大切なこと

喧嘩するのがあるということ  
煩いと思えるということ  
でも、すぐ仲直りするということ  
暖かそうということ

それは私の家族ということ  
一番大好きなこと

「家族」に対するコメント例：

〇〇さんの作った詩はとても優しと思います。なぜなら、私は〇〇さんの作品を読んでから、自分の家族を思い出しました。私は子供の時、いつも従兄弟と遊びました。時々喧嘩しましたが、すぐ仲直りできました。みんな家族からです。そして、私は今家族が住んでいる町から離れて、一人で香港に来ました。家族と一緒に過ぎた時間が減ってしまいました。もうすぐ夏休みですから、速く家に帰りたいと思います。私はこの詩が好きです。

作品例③：「輝く」

輝いているということ  
歌うということ  
最初はひとりということ  
なかまとめぐり逢えること  
ゼロから始めること

勇気ということ

冒険に出ること

輝いていること

それは夢が生まれること

それは夢のために泣いていること

それはヒカリ

それはミライ

それはユメ

憧れ抱きしめていること

そして

前に進むこと

輝いていること

ヒカリになること

ミライを照らすこと

ココロということ

「輝く」に対するコメント例：

「輝く」の人生はどうなるのでしょうか。〇〇さんがそれを見せてくれました。簡単に言うと、それは夢でした。夢があったら、それを指すために、何もやってみたいですから、きっと人生は輝くだろうと思います。そして、詩の中で、「ヒカリ」、「ミライ」、「ユメ」はカタカナで書いてあって、それぞれの意味を強調したいと感じられます。やはり夢と未来は繋がっています。

作品例④：「美しい」

美しいということ

それは花が咲く散るということ

空に虹がかかるとということ

太陽が輝かしいということ

雨がぱらぱら降っているということ

それは大自然から人間に贈ること

美しいということ

それは笑顔が浮かぶということ

肌が赤くなるということ

顔に涙があるということ

震撼させるということ

それは心で感じ取ること

美しいということ

それは言葉

それはリズム

それはアルゴル

それは黄金分割

それはイメージネーション

それは人間が作り出すということ

美しいということ

それは表象した世界ということ

抽象的な価値ということ

それは認識できるということ

認識できないということ

最高だということ

美しいということ

それは客観的だということ

主観的だということ

世界中に何か存在しているということ

「美しい」に対するコメント例：

〇〇が作った詩が美しいものについて述べていますが、私はその詩自体もとても綺麗だと思います。その詩は哲学的なので、私はわからないところが幾つかありますが、〇〇さんが自然なものと人が作ったものも美しいと思って、両方もとても好きだという気持ちがよくわかります。美しいものはこの世に数多ありますが、それが見えるか、どうかのは私たち次第です。

作品例⑤：「幸せを送ろう」

怒りにも負けず

不満にも負けず

疲れにも負けず

どこでも

いつでも

誰にも

優しい人になろう

幸せを送ろう

給仕が注文したものを運んで来た

あなたは頑張っていた彼を無視した  
 そばの子供がずっと泣き叫んだ  
 あなたは不機嫌な顔をしていた

部下が書類を持ってくるのを忘れた  
 あなたはあの部下を叱った  
 それで本当にいいなの

生活は大変でも  
 人に親切にするのは簡単だ  
 微笑み返せばいい  
 理解してあげればいい

「ありがとう」と言えばいい  
 「大丈夫だよ」と言えばいい  
 それだけで  
 誰かを幸せにできる  
 誰かを幸せにしたら  
 自分も幸せになれる

そういう幸せを  
 私は送りたい

「幸せを送ろう」に対するコメント例：

わたしは〇〇さんが書いたことと共感します。特に、みんなが不機嫌な顔をしているのはとても共感します。〇〇さんはやさしい人ですね。幸せを送ろうと言う内容は私の心を捉えました。〇〇さんの詩を読んだら、わたしもこれから周りの人々に微笑みで返してみます。たしかに、香港にいる私たちはあまり笑いませんね。

## 5. まとめと考察

詩の創作に焦点を置いて **creative writing** の活動を紹介してきたが、これらの活動を通して授業担当者である筆者が強く感じている事は以下の4点である。

### 5-1. 「表現者」としての学習者

作品を通して向かい合っているのは日本語を学んでいる「学習者」であるというよりも、日本語を使う「表現者」であるという認識を改めて強くしている。こういった創作活動は一人一人の「表現者」としての個性が前面に出る活動ではないかと思われる。詩の創作で言えば2つの詩のどちらかの型を使うという制限された形式であったものの、そこには非常に個性豊かな表現が載せられていた。改めて言う必要もないことではあるが、教室に集う学習者は一人一人が固有の感性や思い、考えを持っており、その豊かで多様な個性をどう言語表現活動として引



き出せるのかということについて、creative writing は1つの可能性を提示しているように感じている。特に「生きる」の詩に見られるように複雑な文型や文法の知識があまり必要とされない型を使った活動では、母語／非母語話者の境界や日本語使用歴の長短といった違いを超えて、お互いが「表現者」として向かい合うことを容易にしてくれるのではないかと思われる。実際、『生きる わたしたちの思い』『生きる わたしたちの思い第2章』では、多くの人の「生きる」意味をつなげて1つの詩を作るという試みが行われ、各表現者が「生きる」を通じて繋がっていく世界が展開されている。

## 5-2. 活発なインターアクション

こういった活動では豊かで多様な表現が生み出されるため、自ずとインフォメーション・ギャップが大きい状況が生まれ、学習者間のインターアクションが盛んになり、言語学習としてのメリットも大きいように感じられる。グループでの鑑賞後、お互いに送り合ったコメントの内容からもそれは窺える。インターアクションが盛んに行われた例の1つとして、4-4-3 で取り上げた作品例⑤「幸せを送ろう」では第二連において不機嫌な気分させられる事象がまとめられているのだが、冒頭で「給仕が注文したものを運んで来た」とあり、これは嬉しい瞬間なのではないかという指摘がグループ内での鑑賞時にあったが、「香港では多くの場合給仕が不愛想に料理を乱暴に持ってくるので、これは不機嫌になる代表的瞬間だ」ということがインターアクションの結果明らかになった。

## 5-3. シンプルな型が持つ力

俳句／川柳などの創作活動を通して感じていたことでもあるが、詩の創作を通して改めてシンプルな型が持つ表現力の強さを感じた。「生きる」は名詞（文）の繰り返しであるが、型のシンプルさゆえに読者に力強くイメージやメッセージを訴えるという効果が生まれるのだろう。複雑な構造の長文を用いた表現が必ずしも読む人の心を掴むとは限らないことから分かるように、このような表現実践においてはあまり多くの文法知識がない段階の学習者であっても、力強い表現者になりえることを示唆している。

また、型がシンプルだからこそ想像・創造力が発揮されたり、文型以外の表現の工夫が引き出されたりするという側面もあるのかもしれない。作品例①「成長」や作品例④「美しい」などは連のまとまりの効果を上手に生かしていると言え、また作品例①「成長」では「～を取る」という表現や恋愛をめぐる表現が連ごとに対比的に用いられ、作品例②「家族」の第三連でも「～時～たい」の表現が対比的に並べられている。

## 5-4. 豊富な語彙

このような creative writing の活動をする、ほぼ毎回、学習者が用いる語彙の豊富さに気づかされる。これは言い換えれば、多様で豊かな表現作品は語彙の豊富さに支えられているとも言える。教師目線では、学習者が書いてくる語彙の多くはいわゆる初級語彙の中には入っていない。これはもちろん教室内外を問

わずに学習者が様々な日本語に触れて自ら語彙の習得をしているからである。またほぼ全員が漢字圏の学習者であることから、作品例④「美しい」に特徴的に見られるように抽象度が高い語彙であってもその習得が比較的容易に行われていることが窺える。

作品例③「輝く」では「ヒカリ」「ユメ」といった言葉がカタカナで使われているが、これは作者によると自分が好きなアイドルグループの歌詞からこういった言葉の使い方を学んだそうである。また紙幅の関係上割愛したが「モフモフ」「プニプニ」「ちらちら」「ふわふわ」といった豊かな擬態語を用いた詩を創作した学習者もあり、彼らに尋ねたところ歌詞やテレビ番組などからこれらの表現を知り興味を持ってインターネット等で調べたということであった。

## 6. 今後の課題

今後の課題としてまず考えているのはこういった活動を進めながら、まず1つには学習者の創作の過程や背景について調べることである。特に自己表現の大きな力になっている語彙の学びがどのように行われているのか、今後学習者へのインタビュー等を通じて探りたいと考えている。

またもう1つはピアからの学びがどのように進んでいるのかを明らかにすることである。俳句／川柳の創作活動においては多少まとめてみたことがあるが（水戸・瀬尾 2011）、他の活動においても今後、教室内外および Moodle を通した学び合いがどのように進んでいるのか、明らかにできたらと考えている。

## 参考文献

- 谷川俊太郎 with fiends (2008) 『生きる わたしたちの思い』角川 SS コミュニケーションズ
- 谷川俊太郎 with fiends (2009) 『生きる わたしたちの思い 第二章』角川 SS コミュニケーションズ
- 水戸淳子・瀬尾匡輝 (2011) 「香港におけるピア・ラーニングの実践」『アジア日本研究第1号』83-92 The University Alliance for Japanese Studies in HK Macau & GDP
- 水戸淳子 (2013) 「初級後半における物語創作活動」『第9回 OPI 国際シンポジウム予稿集』66-67 日本語プロフィシエンシー研究会
- 水戸淳子 (2014) 「初級後半の学習者による創作活動」ポスター発表 シドニー日本語教育国際研究大会 2012  
<https://icjle2014.arts.unsw.edu.au/jp/program?id=877&t=ppid>
- 水戸淳子 (2016) 「日本語学習者による俳句・川柳の創作活動」『CAJLE 2016 Proceedings』198-201 CAJLE
- 渡辺雅子 (2007) 「日・米・仏の国語教育を読み解く」『日本研究』35, 573-619 国際日本文化研究センター
- Council of Europe (2008) 『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』初版第二刷、吉島茂、大橋理枝（訳、編）朝日出版社